指定研究

# 龍谷大学図書館蔵『源氏物語細流抄』の研究

## ――「関屋」「絵合」の翻刻と解説――

主任　安藤　徹
研究員　糸井通浩
〃　吉海直人
〃　久保田孝夫
〃　辻和良
〃　浅尾広良
〃　朴光華
〃　乾澄子
〃　安田真一
〃　外山敦子
〃　石黒みか

## 一　『源氏物語細流抄』について

龍谷大学大宮図書館の「龍谷蔵」に所蔵されている『源氏物語細流抄』（請求番号021-421-4、以下「本書」と称す）四冊は、『源氏物語』のうち、「澪標」巻から「若菜下」巻まで（ただし、おおよそ一冊分に相当する「初音」～「野分」の各巻は欠）の一六巻についての注釈書である。

『源氏物語』の注釈史は、平安時代末期に成立した藤原（世尊寺）伊行の『源氏釈』や鎌倉時代初期の藤原定家『奥入』などを嚆矢として、中世には『河海抄』（四辻善成著、貞治年間（一三六二～一三六八）成立）や『花鳥余情』（一条兼良著、文明年間（一四六九～一四八七）成立）といった、後世に多大な影響を与えることになる古注釈書がいくつも著され、近世・近代における旺盛な活動を経て現代に至る。そうした陸続と登場する『源氏物語』注釈書の歴史にあって、逍遙院三条西実隆（康生元年（一四五五）～天文六年（一五三七））もまた『細流抄』を作り上げたのだが、「室町後期から江戸初期の『湖月抄』にいたる『源氏物語』研究は、いずれも『細流抄』の影響下にあるといっても過言ではない」[1]とも評されるほど、『細流抄』あるいは実隆の存在感は大きく、そして深い。それは『源氏物語』のみに限られることではなく、実隆は広く「古典学」の最高権威として認知されていたのである。この点について、宮川葉子は次のように述べる。

> 帝に近侍していた関係上、禁裏本の書写や校合に始まった研鑽は、宗祇に古今伝受し、源氏物語や伊勢物語講釈の聴聞を経ることにより、やがて歌壇の中枢の地位を獲得、古典学者として花開いて行く。そして息公条・孫実枝のみならず、外孫九条稙通や正親町公叙へ自らの古典学を相伝することで、近世においては三条西家の古典学と呼べる一つの学統を作り上げたのである。こうした実隆の評価は、（中略）崇拝の対象にまで高まる。しかも実隆個人のみならず三条西家の古典学への崇拝は、帝を中心とする堂上歌壇専用ではなかった。（中略）近世の武家も三条西家に興味を持っていたことに留意しておきたいのである。[2]

実隆にはじまり、子公条（称名院、長享元年（一四八七）～永禄六年（一五六三））や孫実枝（三光院、永正八年（一五一一）～天正七年（一五七九））らによって確立していった古典学の家としての三条西家は、中世後期から近世において多大な影響力を発揮していったのだが、その核となるべきものが『源氏物語』と『古今集』（古今伝授）であった。本書は前者、つまり「源氏学の家」としての三条西家の注釈実態やその史的展開を知る上で貴重な資料である。

実隆は一条兼良―宗祇―肖柏という源氏学の系譜に連なり、それをさらに深化・発展させていった。その彼による『源氏物語』講釈を聴聞した息子の公条が聞書した自筆本が本書である。成立事情については伊井春樹による詳細な研究がある。要点をおおよそ時系列に沿って示せば、次のようになる。[3]

①永正元年（一五〇四）ごろ、[4]実隆は、兼良や宗祇の講釈を聴聞した肖柏がまとめた『源氏聞書』を借り受け、それを基礎資料として第一次本

『弄花抄』を作成した。さらに永正七年（一五一〇）には第二次本『弄花抄』を作成した。『弄花抄』は実隆、そして三条西家の源氏学の出発点・源流ともいうべき注釈書である。

②永正七年（一五一〇）～永正一〇年（一五一三）に、実隆は自身による注釈書として『細流抄』を作成した。

③永正八年（一八一一）～永正一〇年（一五一三）にかけて、実隆は『細流抄』を親本とした一度目の講釈を行う。このとき聴聞した公条が作成したのが第一次本『源氏聞書』である。

④永正一〇年（一五一三）～永正一一年（一五一四）にかけて、実隆は二度目の講釈を行う。このとき聴聞した公条が作成したのが第二次本『源氏聞書』である。学習院大学本国文研究室蔵（三条西家旧蔵）『源氏聞書』一冊は、そのうちの「桐壺」巻～「花宴」巻の残欠本である。また、龍谷大学大宮図書館蔵『源氏物語聞書』（請求番号913.36-14-16、写字台文庫）の一六冊目にあたる「初音歌詞巻」は江戸時代の転写本ではあるが、「初音」巻～「竹河」巻が収められている。

⑤大永三年（一五二三）、公条は第二次本『源氏聞書』を用いて講釈をした。

⑥大永五年（一五二五）、能登守護であった畠山義総が『源氏物語』注釈書を求めてきた。そこで、実隆は「桐壺」巻のみ「桐壺愚抄」を書き、「帚木」巻以降は第一次本『源氏聞書』を基にし、さらに第二次本の増補注をも加えつつ公条が草稿本を作成し、実隆の校閲を経て清書していった。この注釈書は大永八年（一五二八）に全巻完成を見る。これが初度の能登送付本『源氏聞書』である。[5] 本書はこのとき作られた公条草稿本の一部であり、そのツレが東北大学附属図書館の狩野文庫に存在する。[6]

⑦公条は、草稿本聞書を手元に置いて講釈の親本として利用し、あるいは注記を増補したりしていった。

⑧天文二年（一五三三）、自邸の火災によって⑥の初度能登送付本『源氏聞書』を失った義総は、再び注釈書を依頼してきた。そこで、今回は「桐壺」巻も含めてすべて公条の『源氏聞書』に拠ることとし、⑥で作成した草稿本聞書をもとに再び清書して送った。これが再度の能登送付本『源氏聞書』である。

⑨天文八年（一五三九）～天文一〇年（一五四一）ごろ、草稿本聞書を転写し、注記などを整理して、新たな注釈書『明星抄』を作成した。ただし、公条はその後も草稿本聞書を愛用していたようで、自筆本には天文二〇年（一五五一）までの注記も見える。

こうした経緯が認められるとすれば、本書を『細流抄』と称することは必ずしも正確ではないことになる。つまり、『細流抄』を親本とした実隆の講釈を聞書したものを基に、能登に送付するための注釈書の草稿として公条が書いたノートが本書なのであり、しかもそこには公条独自の長年にわたる注記も書き込まれているのであれば、実隆の『細流抄』そのものとは区別すべき公条の注釈書と見なさなければなるまい。

そこで、いま仮に「草稿本聞書」と称してきたのであるが、しかし一方で、実隆の日記『実隆公記』天文二年三月一一日条には「能州有状、細流抄所望事也」とあり、あるいは義総もまた、

次十一月十六日貴礼同到来、殊細流抄御奥書外題拝見、喜悦千万候(7)

というように、能登へ送付した側も能登で受け取った側も『細流抄』と呼んでいるという事実がある。これについて伊井は、「当時はそれほど区別する意識がなく二つの名称（『帥源氏聞書』と『細流抄』のこと。「帥」は公条を指す：安藤注）が用いられていたようである(8)」とする。本書を『細流抄』とする故がないわけではないのである。

そもそも『源氏物語細流抄』という書名は、『龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録(9)』に載る仮題である。目録は「三条西公条自筆稿本」とも注記している。実隆の『細流抄』そのものと混乱を招かないように公条草稿本聞書であることを示しつつ、一方で『細流抄』とも呼ばれたという歴史的証言をも勘案したとき、目録の注記を生かした『三条西公条自筆稿本　源氏物語細流抄』という書名を（やや煩わしい名ではあるが）本書に仮に宛てておきたいと思う(10)。

繰り返すが、本書は『細流抄』そのものではなく、むしろ公条の『明星抄』に近しい性格を持ちつつ、なおそれとも異なる独自の注記を含んだ注釈書として、公条（三条西家）における活発な注釈活動の（増殖）過程をかいま見せてくれるのである。また、本書は「稙通」（実隆の孫で、公条の甥にあたる九条稙通）などから「逍遥院」宛てに送られた書簡の裏を利用しており、その紙背文書も注目すべきものとしてある(11)。

本書は現在、第一冊目（澪標・蓬生・関屋・絵合）だけが袋綴じで、残りの三冊は一丁分を細長く開いた形で右端を綴じ直してある。第二冊目（松風・薄雲・朝顔・少女・玉鬘）・第三冊目（行幸・藤袴・真木柱・梅枝・藤裏葉）・第四冊目（若菜上・下）の中央にみえる折れ目や左上に後筆で書き込まれた各冊ごとの通し番号（丁数にあたる）、あるいは第一冊目の状態などから鑑みて、本来は袋綴じされていたのを開いたものであることは間違いなかろう。おそらくは、紙背文書を見るために一旦ほどき、その後乱丁を避けるために通し番号を付した上で開いたままで再度綴

じ直したのであろう。ただし、それがいつ、誰によってなされたのかは今のところ確認できていない。なお、東北大学本も同じように開いたままで綴じられている。本書の詳しい書誌については、改めて別に報告する機会を持つことにしたい。(12)

以下、本書の具体的な注釈の様相を紹介するために、次節では第一冊目のうちの「関屋」「絵合」両巻（二八丁～三八丁）の翻刻を載せ、第三節ではそれに基づいた『細流抄』『明星抄』との比較検討を若干行うことにする。

（安藤　徹）

## 二　「関屋」「絵合」の翻刻

《凡　例》

翻刻にあたっては、底本の表記を尊重しつつ、次のような方針にしたがって一部加工した。

1　底本で用いられている異体字・旧字体は、現在通行の字体に改める。

2　底本の仮名表記のうち、全体が漢字カタカナ交じりで表記されている小書き箇所の場合などはカタカナのままとする。それ以外については原則としてひらがなとして扱う。

3　反復記号は底本のままとする。底本にない句読点や濁点は施さない。合点については「レ」で示す。

4　見出し項目と注釈部分との間にある縦線は、「―」（ダッシ）で示す。

5　注釈部分中で明らかに文末と判断できる箇所には空白を一字分挿入する。それ以外の箇所は、底本に空白があると認められる場合も原則として詰めて翻刻する。

6　改行は底本のままではなく、原則として見出し項目ごとに追い込む。ただし、同一項目が丁やオモテ・ウラをまたぐ箇所については、底本どおりに改行する。

7　底本に見られる補入については、補入記号（補入箇所の指示）のある場合は〈　〉に入れて、補入記号（指示）のない場合は【　】に入れ

て、それぞれ示す。

8　墨消し（含、見せ消ち）による本文の抹消は、左傍線により示す。抹消された文字は判読できる範囲において翻刻し、判読できない部分は12の判読不能文字と同様に扱う（抹消文字数の見当がつく場合はその字数分、判別できない場合は二字分を宛てる）。訂正して書き込まれた文字は、消された文字の下に（　）に入れて示す。

9　明らかに振り仮名（読み仮名）として本文傍らに書き入れられた文字は、そのままルビとして傍記の形にする。

10　補入・墨消しによるものでなく、また明確に振り仮名とも判別できないような傍記は、該当する本文の右傍に・（傍点）を付し、その下に（　）に入れて示す。

11　明らかに小書きされている部分は、【　】で括る。内容的に前後と区別して扱ったほうがよいと思われる場合は、改行して独立した一つの項目とみなす。

12　虫損や汚損、あるいは字型が不整であるかして判読不能の文字は□により示す。

13　半丁ごとにその末尾に」をつけ、（2ウ）（10オ）などと示す。（2ウ）は二丁ウラ、（10オ）は一〇丁オモテの意である。なお、書き込みのない半丁は《空白》と記す。

14　便宜的に、巻ごとの項目通し番号をそれぞれの頭に算用数字三桁で付す。また、該当する『源氏物語』本文の位置を示すために、新編日本古典文学全集（小学館）『源氏物語2』の頁・行数を見出しの後の（　）内に漢数字で掲げる。

15　底本の状況について説明を要する箇所には、該当箇所の後ろに①、②、③……と番号を付して、半丁ごとに後注する。

（安藤　徹）

《翻　刻》

**関屋**

巻名以詞名之　あふさかの関やいかなるとあるやの字は助の字也　不可為巻名　関屋よりさとくつれ出たるとある詞より名つけたり

源廿八才の九月までの事也　花鳥竪の並と云々　然れとも横の並也

001 いよのすけ（三五九・一）―伊予の任はてゝ上洛する也

002 またのとしひたちになりて（三五九・二）―源氏すまへ赴給し前の年常陸になりてくたりし也

003 かのはゝきゝも（三五九・三）―空蟬也

004 つくはねのやまを（三五九・五）―かひかねをねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらんの歌にてかけり　かひかねを〈常陸の事なれは〉つくはねに用かへ□るたる也　此歌の心はねこし山こしと云て幾重の山をかこえつらんと云心也　されは用かへたるそ（も）おもしろしと也　ことつても申たく思へともうきたる様なるたよりは」（27オ）

かへりて聊爾なるよしを思て中〳〵おとつれも申ささる（りし）と也

005 かきれる事も（三五九・七）―源の須まへくたり給しは今年まて三ケ年也　ひたちにくたりしは此前の年也　されは一任四ケ年にてのほるよしよくかなへり

006 京にかへりすみ給て（三五九・七）―五年めにのほるとみえたり

007 せきいる日しも（三五九・九）―ひたちの守京にいる日也

008 車ともかきおろし（三六〇・四）―牛をはつす也

009 かたへはをくらかし（三六〇・五）―類ひろき故にあとさき〔に〕少々〈まへの日も〉上洛する也

010 車とをはかりそ（三六〇・六）―けふは車十両はかりあると也

011 〔斎宮の（三六〇・七）―伊勢の斎宮也

012 なにそやうの（三六〇・八）―賀茂祭なとの事を思へり〕①

013 殿もかく世に（三六〇・八）―春にあひたる様也

014 せき屋よりさとくつれいてたる（三六〇・一三）―源の□②とをり給故に皆出かしこまり居たる也

015 色〳〵のあを（三六〇・一三）―狩襖也　面布にてうら絹也　昔はぬい③物なとをもする也　又くゝりそめしたるもあり　当時すあをとて着するは此あををのうらをのけたる物也」（27ウ）

①010と013との行間に、011・012が一行書きで挿入。
②「御」を消すか。
③何かの字の上に「い」と書くか。

016 御くるまはすたれおろし（三六〇・一四）―旅人のおほき故憚給よし也さらては車の簾へさしたる事なきに〉おろす事はなき物也

017 かのむかしの小君（三六〇・一四）―これも今上洛する也

018 けふのせきむかへ（三六〇・一五）―空蟬の方へ源の言伝し給也　随分

けふの関むかへに出給るのよし也（にいゝなし給へる興あり）
総して唐人なとも送迎をは関をかきりて行也
019 ゆくとくと（三六一・五）―①し水よりも涙はふかきよし也
020 えしり給はし（三六一・七）―空蟬の心中に思歌なれは也
021 いしやまより（三六一・八）―参籠とみえたり
022 衛門のすけ（三六一・八）―小君也　御むかへにまいる也
023 一日まかり（三六一・九）―まうて給し時御ともにさふらはさるをこたりにまいる也
024 おほえぬ世の（三六一・一三）―須まの事也
025 紀伊のかみ（三六一・一五）―常陸のすけ（いよかみ）の子也　中川の家あるし也
026 右近のそう（三六二・一）―大将のかりの随身せし人也　須まへ相随たて」（28オ）

①改行一字下げで、以下の注釈を載せる。

まつりし也　【此人を】一段寵（抽）賞してみせ給也　刑をは□つゝ罰をはあさくし給也
027 すけめしよせて（三六二・四）―衛門のすけ也
028 いまはおほしわすれぬへき（三六二・四）―衛門のすけの思也　空蟬をよくわすれ給はさるよと也
029 一日はちきり（三六二・五）―文の詞　行あひ給はふるき契なると也
030 わくらはに（三六二・七）　①たまさかに行あひぬれと逢事のなきよし也　近江によせたり　しほならぬ海はみるめなきと云也
031 せきもりの（三六二・九）―ひたちのすけ我物にして具して上洛せしをいへり
032 むかしにすこしおほしのく事（三六二・一三）―小君か源氏に随奉らぬ故にかく思ける也　おほしのくとは遠さかるをいへり　かくまて念比にの給し物をと也
033 女にては（三六三・一）―女の身にてはさらにくるしからぬと也」（28ウ）

①「わくらはに」の後に縦線なく、改行一字下げで以下の注釈を載せる。

034 いまはまして（三六三・二）―空蟬の心也
035 めつらしき（三六三・二）―草子地也①
036 あふさかの（三六三・五）―②関の景気也　むかしより源と空蟬との中は如此と也
037 ゆめのやうに（三六三・七）―うつゝともなき也
038 あはれもつらさも（三六三・七）―源の心中也

039 この君の（三六三・三）―空蟬の事也　我か在世にかはらさるやうにと也
040 しはしこそ（三六四・六）―いつれも子ともものためには継母なる故也
041 たゝこのかうちのかみ（三六四・八）―中川のあるし也　昔より心にかけし故に心をはこふ也
042 かみもいとつらう（三六四・一五）―河内守也
043 のこりの御よはひ（三六五・一）―残生をはいかゝと也
044 あいなのさかしらや（三六五・二）―草子地也

大永六　臘　廿二日了」（29オ）

①035は、034と036との行間に挿入したか。
②改行一字下げで、以下の注釈を載せる。

《空白》」（29ウ）

**絵合**

以詞為巻名　両度の絵合あり　内ゝ又外様とみえたり　凡天徳の歌合に模してかけりとみえたり　冷泉院を村上に比したる也
源卅歳の三月也　物語のうへには廿九歳の事たしかにみえす
但前斎宮の御まいりの事廿九歳の冬あるへきかとみえたり　其故は故宮す所の〈周忌霜月辺なるへし　然は其末に入内あるへし　正二月の間に入内あらは此絵合やかてはあるましき歟と云

ゝ〉①

001 前斎宮の御まいり（三六九・一）―秋好也　冷泉院の女御にまいり給也　斎宮の人帰京ありて入内の例河海にみえたり
002 中宮の（三六九・一）―薄雲也　御出家の後なれとも只今別に中宮なし　さてまきれ□る（なき）故にかくかける也　薄雲の御心此入内の事可然よしの給事蓬生巻にみえ侍り
003 とりたてたる（三六九・三）―源しの心
004 二条院に（三六九・五）―□二条院より入内あるへき歟なと思給たれと朱院へのきこえをおほしてそらしらすし給也」（30オ）

①この補入は、002の後にあり。

005 その日になりて（三六九・九）―入内の日也
006 かうこ（三七〇・一〇）―この字清濁両様也
007 百ふのほかを（三七〇・一三）―はるかにの心也
008 おとゝのきみ（三七〇・一）―源さためてみ給へきとて也
009 かくなんと（三七〇・四）―源にみせたてまつる也
010 たゝ御くしの（三七〇・五）―□〈たゝの字有感〉源の大概に御覧して大やうに上臈しきやうたい心をつけてみるへし
011 わかれちに（三七〇・七）―①榊の巻にて わかれのくしさし給時帰京

あるましき由の御詞をかこつけにてはるかなる中の契に神のいさめ給かと也

012 なにゝ②

012 おとゝこれを御覧し（三七〇・九）―此種□（こ）の御音信を大かたに見給也　御歌なとはよく見給にてはあるへからす

013 かゝるたかひめ（三七〇・一三）―冷泉院へ参り給ふ事朱雀院の御心をしはかり給也

014 なにゝかく（三七〇・一五）―此入内の事はたゝ我心ひとつの事□也（たる）也」（30ウ）

①改行一字下げで、以下の注釈を載せる。
②「なにゝ」は、014「なにゝかく」の「なにゝ」を書いた後で、012・013の二項目を落としたことに気づき、墨消ししたものか。

015 つらしとも思きこえしかと（三七一・二）―須まの左遷の事

016 またなつかしう（三七一・二）―朱雀院の御心ひとつにてもなきと思なす也

017 とはかりうちなかめ（三七一・三）―時はかり也　しはし（らく）と也①

018 この御返は（三七一・五）―源の詞也

019 又御せうそこも（三七一・六）―院よりは御ふみもあるへきと也

020 いとあるましき（三七一・一〇）―御返事なくてはかなふましきと也

021 へしるしはかり（三七一・一二）―こま〳〵とまてはなくとも申されよ也　いかさまにも御返事なくてはと也〉②花鳥の説【〈今とナリテ御文カヨイはあるましと云こ〉】③いかゝ

022 いにしへおほしいつるに（三七一・一三）―大極殿にての事也　御涙をおとし給し事なと也　其時は朱雀院は廿五才也

023 こみやすん所の（三七一・一五）―宮す所同輿し給し事也

024 わかるとて（三七二・二）―④かへりてとは帰京ありて也　かへりみし給ひそとの給ししるしもなきと也」（31オ）

①「せ」の上から「也」と書くか。
②「花鳥の説いかゝ」の後に改行して補入。
③この小書きは、「花鳥の説」の内容に関する補入。
④改行一字下げで、以下の注釈を載せる。

025 院の御ありさま（三七二・六）―源の心也　中宮（秋好）の御心には院を心よせに思給へきと也　にくきかたに思やり給也

026 うちはまたいといはけなく（三七三・八）―此巻はみをつくしの巻の次の年にはあらす　三年めなるへし　内は十三才はかりにてましますへし①

027 すりの宰相（三七三・一三）―参議にて修理大夫をかけたる人なるへし系図にみえす

028 よき女房なとは（三七三・一）―故御息所の御時より可然人おほくさふらひ侍也
029 あはれおはせましかは（三七三・三）―故宮す所の事也
030 中宮も（三七三・八）―薄雲也　常には三条宮にまします也
031 宮も（三七三・一一）―薄雲也
032 人しれす（三七三・一三）―主上の御心の中也
033 こきてんには（三七四・二）―致仕のおとゝの女也　おさなくましますに故にあそひかたきにかたらひつき給也
034 あなたかち（三七四・六）―弘徽殿也」（31ウ）

①この項目の上に、印らしき曲線あり。

035 権中納言（三七四・七）―致仕大臣はこのたひの中宮に〈も〉と思てまいらせ給也
036 院には（三七四・一〇）―朱雀院也
037 斎宮のくたり（三七四・一三）―源の申出して院の御心をもこゝろみんとて也　まへにわすれぬふしに仰られし程に也
038 とかうかの御事を（三七五・一）―とかく申いたし給也
039 めてたしと（三七五・四）―秋好の体の事也　院の別のくしさし給時見給し也　源はいまたほのかにもみたてまつり給はむさる故にゆかしく思給也
040 心にくき御気はひ（三七五・八）―斎宮のおくふかなるさま也
041 見たてまつり給ふ（三七五・九）―対面したるにはあらさる也け（す）気はひなとをいへり―
042 かくすきまなくて（三七五・一一）―秋好弘徽殿也
043 兵部卿宮（三七五・一二）―紫上の父宮也　此御むすめ入内あるへき事まへにみえたり
044 御かとをとなひ〈給〉なは（三七五・一三）―外戚也　〈兵部卿宮は〉薄雲の兄弟なれは也
045 ましてをかしけなる（三七六・六）―殿上人なとさへ絵をこのましく」（32オ）
するをは心とゝめ給へり　まして秋好なとかき給をは一しほ御心にかけ給也
046 まほならす（三七六・七）―□秋好也
047 月なみの（三七七・一）―十二月の絵なるへし
048 【又】こなたにても（三七七・三）―絵に心をとめ給故也
049 この御かたに（三七七・四）―秋好の御かた也
050 殿に（三七七・一〇）―二条院也
051 女君と（三七七・一一）―紫上也

052 長恨歌王昭君（三七七・三）―但今事の始なる故に斟酌ある也　いつれも不吉なる故也　かやうの事いかに〈も〉気（心）つかひあるへき事と也

053 こたみは（三七七・一四）―このたひ也

054 かのたひの（三七七・一五）―須まにての絵也

055 いまゝて（三七八・四）―紫上のうらみ給也

056 ひとりゐて（三七八・六）―①須ま巻には女君も書給たりとみゆ　されとも今も忍て」（32ウ）

①改行一字下げで、以下の注釈を載せる。

かくよみ給へり　そのおりに（の）なくさみにはかやうの絵をかきかはしても（なとを）みるへかりし物をと也　此時紫上も日記のやうにかき給しよし幻の巻にみえたり　只今は源には今まてみせ給はさるよしをうらみ給へと源にも又紫上の絵をはかくし①給也②

057 うきめみし（三七八・一〇）―③一二句は須まあかしのうつろひをいへり　〈涙かは涙哉也〉涙と浪とをかけたり　過にしかたに立帰ることくなると也

058 中宮（三七八・一三）―薄雲也

059 かたはなるへましき（三七八・一三）―□此中にてすくれたるを撰給也　絵合のあるへき張本にかきいたせり

060 やよひの十日の（三七九・三）―公事なともなく隙ある時分也

061 おなしくは御覧し（三七九・六）―絵合のくはたて也

062 こなたかなた（三七九・七）―弘徽殿梅壺也

063 むめつほ（三七九・九）―秋好也

064 名たかくゆへある（三七九・九）―ふるき絵とも也④

065 うちみるめの（三七九・一一）―当世の絵なれはうちみる処きら〳〵しく目とまる也」（33オ）

①「かつし」または「かへし」の上から「かくし」と書く。
②何かの字の上に「也」と書くか。
③改行一字下げで、以下の注釈を載せる。
④063から改行せず、同じ行に続けて064を書く。

毎事如此物也

066 これはかれは（三七九・一三）―評したる也

067 中宮も（三八〇・一）―薄雲也

068 かた〳〵御覧し（三八〇・一）―中宮もすき給事故とりもち給也

069 ひたりみきと（三八〇・四）―是則内々の絵合也

070 いうそく（三八〇・六）―有職也　河海にみえたり

071 竹とりのおきなに（三八〇・八）―竹とり〈かくやひめの物語也〉万

葉に若菜の事によめるは此物語にはあらす　六百番に顕昭たかとりとよめるは万葉竹取也　別の事也

072 〈なよ竹のよゝに（三八〇・九）―花鳥に【物語】大意を□る（は）みえたり　先右の方より難を加へ侍り〉①

073 神世の事なめれは（三八〇・一一）―花鳥上代と云〻尤おもしろし

074 ゑはこせのあふみ（三八一・四）―②昌泰二年二月除目執筆時平公讃岐少目従八位下巨勢朝臣相見【画師】云〻　貫之も同時たるへき也

075 かんやかみ（三八一・五）―常は宿紙をいへり　こゝは只色紙也　唐の」（33ウ）

①073の後に補入。
②改行一字下げで、以下の注釈を載せる。

綺にて張たるなるへし

076 としかけは（三八一・六）―うつほの物語也　十二三才の時遣唐使にて波斯国に到りて（れり）　うつ①ほ木のなかにありて琴をひく事あり　唐日本に妙を弾する也　孝行の者也　阿修羅琴を造てあたへし事あり

077 つねのり（三八一・一三）―当時の絵師也　栄花物語屏風そろへられたる所にもかや②うにある也

078 【〈③みちかせ（三八一・一三）―〈血脈　義之―道風
―魚養―弘法大師
―献之
〈小野氏　敏達天皇第六世
―小野篁
―葛絃―道風〉④】

079 左には（三八一・一三）―左の劣たる也⑤

080 伊勢物語（三八一・一四）―右也⑥

081 正三位を（三八一・一四）―〈左也〉　此物語当今の代にみえすと花鳥にしるさる

082 平内侍（三八二・二）―左の方人也

083 いせのうみの（三八二・三）―⑦いまやうの事にみなまけてはふるき物語はあるましきかと也

084 雲の上に（三八二・七）―⑧正三位の物語にある事なるへし　兵衛大君も此物語の中にある人なるへし　雲の上にのほれる事あるへき也　千いろの」（34オ）

①「ほ」の上から「つ」と書くか。
②「へ」の上から「や」と書くか。
③系譜に付された合点及び線はすべて朱。また、「みちかせ」から「敏達天皇第六世」まで朱線を引く。なおこの項目は077～083にかけての余

白部分を利用して小書きされている。いま仮に一項目として立てる。
④「小野氏」以下の補入は、「みちかせ」についての注。
⑤この項目、077と081の行間に挿入したか。
⑥この項目、079から改行せず、同じ行に続けて書く。なお、080は「左」、081は「右」と注すべきところ。書き誤りか。
⑦改行一字下げで、以下の注釈を載せる。
⑧改行一字下げで、以下の注釈を載せる。

①そこは伊勢の海をいへり

085 さい五中将（三六二・九）―薄雲勝□（と）定給也

086 宮（三六二・一〇）―薄雲也

087 みるめこそ（三六二・一一）―②此歌を藤梅壺の御歌のよし花鳥にしるさる　いかゝ　と□也　斎宮（梅壺）は我御方の絵なれはかやうにはの給ましき也　いかにも薄雲の御歌なるへし　今尼にてましますゆへにいせをのあ□□（海士と）はよみ給へる也

088 一まきに（三六二・一三）―結句の番【を】肝要□（と）あらそふ也　こゝまては内々の合也

089 うへのも宮のも（三六二・一五）―内のと斎宮との事歟　花鳥に初度絵合は斎宮と内と云々

090 御前にて（三六三・四）―主上の御前也　天徳歌合を摸せり

091 かのすまの（あかし）（三六三・六）―左遷の愁をもあらはし給はんの心あるへし

092 かみ絵を（三六三・八）―昔は多分絹に書也　紙絵はまれなる也

093 いまあらためかゝむ事は（三六三・九）―源の方よりの給也　今新にかゝせたる曲もなきと也」（34ウ）

①行頭字下げの指示あり。見出しの位置から書いてしまったための処置。

②改行一字下げで、以下の注釈を載せる。

094 院にも（三六三・一三）―朱雀院也　梅つほ（秋好）をおほしはなたぬ御心にや

095 むめつほ（三六三・一三）―秋好也

096 えんきの（三六三・一五）―桐壺帝を延喜帝に比する事顕然たる也

097 又わか御よの事も（三六四・一）―朱雀院の御代也

098 きむもち（三六四・五）―公茂也　絵師金岡か孫と云々

099 えんにすきたるちんのはこ（三六四・六）―花鳥両儀あり　ゑりすかしたる筥の説可然乎

100 心は（三六四・六）―花説可然也

101 たゝこと葉にて（三六四・七）―文はなき也

102 左こんの中将を（三六四・八）―院の昇殿をもゆりたる物（もの）也

103 かう〳〵しきに（三六四・九）―神〳〵しきと也

104 身こそかく（三六四・一〇）―①院の御製也　あはれなる御歌也　今こ

そあれ昔の大極殿の儀式はわすれ給はぬと也

105 むかしの御かんさし（三八四・三）―河海長恨歌を□□り」（35オ）

①改行一字下げで、以下の注釈を載せる。

花鳥説尤有興有味者也

106 しめのうちは（三八四・一四）―①朱雀院の御在位の時の斎宮にてありし時を恋しきのよし也

107 おとゝをもつらしと（三八五・四）―草子地〈の〉評也　須磨の事をいへり

108 きさいの宮より（三八五・六）―故弘徽殿の大后より伝□也（相伝ある）也

109 あの女御（三八五・六）―権中納言の方の女御の御伝かたへも伝るへし也

110 〈尚侍の〉かんの君（三八五・七）―〈朧月夜也〉女御□（の）をはにてましますゆへにをのつから伝り侍る也

111 〈ひたりみき（三八五・一〇）―左は梅つほ右は弘徽殿也　西むきにて右は北左は南也〉②

112 女房のさふらひ（三八五・一一）―台盤所也　主上まします也

113 こうらう殿の（三八五・一三）―台盤所の西也東

114 【をの〳〵心よせつゝ（三八五・一三）―各我方人〳〵ノ心アリテキヽヰタルナルヘシ】③

115 左はしたむのはこに（三八五・一三）―④」（35ウ）

①改行一字下げで、以下の注釈を載せる。
②112の後に補入。
③113の下余白部分に書く。
④改行一字下げで、以下（36オ）の注釈を載せる。

先うちしきをしきて其上にしたつくへ（ゑ）を置て其上のしき物に紫の唐錦をしきて其にわら（又）つくゑを置てさて紫檀の箱に絵をいれて置也　又右にはうちしきはあをにのこまの錦と許ありてした机のうへのしき物をいはす　これは文章のあやに略してかゝさる也　左右ともに置様はおなし物なるへし

116 わらは六人（三八五・一五）―雑役を勤すへき用也

117 あをに（三八六・二）―崩木に黄のましわ①たる也

118 あしゆひのくみ（三八六・二）―くみにて花足をからみたる也　花鳥説可然　花鳥説可然

119 まへしりへと（三八六・四）―まへは左しりへは右也

120 そちの宮も（三八六・五）―〈蛍の宮也〉　絵をすき給故に其事となくめし給也（あり）て此絵の判者をし給也

121 かみゑはかきりありて（三八六・一三）―絹ははたはり長し　〈紙は〉

短き故に書のへさる所ありてさそと思やらるゝ所のある也」（36オ）

①「わ」は「り」の誤り。

122 むかしのあと（三六・一五）―不恥古也

123 あさかれい（三七・三）―花説西の障子と云々　然れとも東なるへし　其故は朝餉と清涼殿とのあはひなるへし

124 中宮も（三七・三）―薄雲也　かやうの絵なとの　かたよくしりたる人□（給へる）故にはつかしきと也

125 〈【ふかうしろしめしたらんと思に（三七・三）―中宮ノ御事也

126 おとゝもいといふにおもほされて（三七・四）―読キルヘシ

127 所〳〵のはんとも（三七・四）―これは中宮の御事ナルヘシ

128 あらまほし①（三七・六）―源ノ心ニ中宮の御様体あらまほしと思給也　源ノサシいらへと見成た②り　いかゝ　今□③】〉

129 ／④さしいらへ（三七・五）―源也

130 心のかきり思すまして（三七・一〇）―源の思すまして書給也

131 いはけなきほとより（三八・一〇）―源の詞也

132 院のゝたまはせし（三八・三）―桐壺の帝也

133 いのちさいはひ（三八・一四）―顔回なとの類也

134 ほんさい（三九・一）―天下をまつりこつへきかたを能をしへ給也

135 つたなき事（三九・二）―いたらぬ事もなきと也

136 おほえぬ山かつに（三九・五）―須磨のうつろひの事也

137 なにのさえも（三九・一〇）―帥の宮の詞

138 をのつからうつさんに（三九・一三）―諸道皆師範ありて（る物）なれは学ひ⑤得へき也」（36ウ）

①128「あらまほし」は、『源氏物語』本文に従えば129「さしいらへ」の後にくるべき。125から128まで一連の小書き補入であるため、底本のままの順序で翻刻しておく。

②「成た」は別字か。不審。

③「今」に続く字は「案」か。

④129「さしいらへ」の上にある合点は、125から128までの補入位置を示すものであろう。なお、この一連の補入は124から133にかけての余白部分を利用して小書きされている。

⑤「ふ」の上から「ひ」と書く。

139 筆とる事と（三九・一三）―絵かく事師も不伝所あると也

140 ふかきらうなく（三九・一四）―智恵ある物はかりよくするわさ{か}と思へはをれ物はをろかなる物也　愚なるやうなる人もきはめてよくするわさ也

141 家のこ（三九・一五）―たかき家の人〳〵也

142 猶人にぬけぬる（三九・一五）―源をさしていへり　□天然諸道に器量あるをいへり

143 そのなかにも（三九〇・三）―連枝多くましますなかに源独傑出なる也　此帥宮も連枝也

144 琴ひかせ（三九〇・五）―文采（才）をは第一にして次に管絃をいへり　礼楽の次第をいへる也　かやうに諸道の達したる人は北辺左大臣信公の事を下にふく（ふく）①めり

145 まさなきまて（三九〇・九）―つよくほめたる也

146 廿日あまりの（三九〇・三）―まへの絵合は十日比也

147 こなたは（三九〇・三）―台盤所は西むきなれは也」（37オ）

①「し」の上から「ふ」と書き、つづけて「く」と書いた上で、さらに右傍に改めて「ふく」と書く。

148 ふんのつかさ（三九〇・四）―女官也　和琴なとあつかる①人也

149 さはいへと（三九〇・五）―源一人のやうにいへと此中納言も源にをとらさる人と也

150 うへ人の中に（三九一・二）―こゝに祇候の人の中也

151 みこは御そ（三九一・六）―今日の判者たる故也

152 うら〳〵のまきは（三九一・八）―薄雲へまいらせ給也

153 またのこりの（三九一・一〇）―御覧せられたきと也

154 うへにも（三九一・一一）―主（主）②上も興ありとおほす也

155 権中納言は（三九一・一三）―心のやみ也　弘③徽殿の事を思へり

156 さるへきせちゑ（三九二・三）―至今延喜天暦と云ことくに冷泉院をは天暦に比してさやうにいはれんと也　実なる事を本として又遊の事もありしと也

157 おとゝ（三九二・六）―源也　休退すへきと也　今聊（すこし）御主上も御成人ありてと思給也

158 〈むかしのためしをみきくに（三九二・八）―【後漢書曰位尊（ケレハ）身危（シ）財多（ケレハ）命殆（アヤウシ）〳功名名④遂而身退天之道⑤也　運命論　木秀レ□於レ林一風必摧之　行高二於人一衆必非之】〉⑥

159 なかころなきになりて（三九二・一〇）―須まの事也　此事故に今までの」（37ウ）

①「り」の上から「る」と書く。
②「主」の右傍に改めて「主」と書く。
③何かの字の上に「弘」と書くか。
④下の「名」は見せ消ちか。
⑤「道」は別字か。
⑥159の注記途中（37ウの左余白部分）にこの補入あり。なお、「運命論」以下は38オの159の注記下余白部分に書かれているが、便宜的に続けて翻刻しておく。「運命論」は『文選』所収。

命をたもつと也

160 御たうつくらせ（三九二・一四）―嵯峨〈の〉山庄の事あら〳〵書出し侍也　松風巻に此春よりと云〻

161 するがの君たち（三九二・一五）―夕霧明石のひめ君也　《後表紙見返し　空白》」
162 いかにおほしをきつる（三九二・三）―草子地也」（38オ）

《後表紙　空白》」（第一冊目了）

大永七　正　十七了」（38ウ）

（石黒　みか、安藤　徹）

## 三　『細流抄』『明星抄』との見出し項目の比較

第一節で述べたように、本書は『細流抄』から『明星抄』へ、さらにそれ以後へと継承深化していく三条西家源氏学の史的展開を知る上で貴重なテクストである。そうした本書の特徴の一端を具体的に示すために、ここでは第二節に掲げた翻刻のうち、見出し項目に限って『細流抄』『明星抄』と比較する(13)。

見出し項目について、三書間で異同のあるもの（漢字の宛て方や仮名遣いの違い程度のものは除く）を挙げれば〔表〕のようになる。なお、表中「通し番号」の「＋」は、本書にはない項目の位置を示すために便宜的に付した。例えば、「関屋 039＋」とあるのは、本書の関屋 039の項目の次に位置することを意味する。また、『明星抄』の欄に（細字）とあるのは、『明星抄』の写本である高松宮家本（高本）では細字で書かれている項目（版本にもあり）であることを指す。

〔表〕『細流抄』・『源氏物語細流抄』・『明星抄』で異同のある見出し項目

| 通し番号 | 『細　流　抄』 | 『源氏物語細流抄』 | 『明　星　抄』 |
|---|---|---|---|
| 関屋 006 | 京にかへりすみ | 京にかへりすみ給て | 京にかへり住給て |
| 関屋 010 | 車とをはかり | 車とをはかりそ | 車とをはかりそ |
| 関屋 011 | 斎宮 | 斎宮の | 斎宮の |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 関屋 013 | （ナシ） | 殿もかく世に | 殿もかく世に |
| 関屋 014 | せきやよりさとくつれ | せき屋よりさとくつれいてたる | 関屋よりさとくつれ出たる |
| 関屋 022 | ゐもんすけ | 衛門のすけ | 衛門のすけ |
| 関屋 037 | （ナシ） | ゆめのやうに | 夢のやうに |
| 関屋 039＋ | （ナシ） | （ナシ） | のこしをく玉しゐもかな（細字） |
| 絵合 005＋ | （ナシ） | （ナシ） | うちみたりの箱（細字） |
| 絵合 006 | かうこ | かうこ | かうこの（高本「の」ナシ） |
| 絵合 007＋ | （ナシ） | （ナシ） | とゝのへさせ給へり（細字） |
| 絵合 010 | たゝ御くしの | たゝ御くしの | たゝ御こしの（「こし」―高本「くし」） |
| 絵合 010＋ | （ナシ） | （ナシ） | さしくし（細字） |
| 絵合 015 | つらしとも思ひきこえし | つらしとも思きこえしかと | つらしとも思ひ聞えしかと |
| 絵合 019 | 又御せうそこも | 又御せうそこも | 文御せうそこも |
| 絵合 022 | いにしへ覚しいつる | いにしへおほしいつるに | いにしへおほし出るに |
| 絵合 023 | こみやす所 | こみやすん所の | 古御息所の |
| 絵合 026 | （ナシ） | うちはまたいといはけなく | うちはまたいといはけなく |
| 絵合 026＋ | （ナシ） | （ナシ） | にくき事をさへ（細字） |
| 絵合 028 | よき女房 | よき女房なとは | よき女房なとは |
| 絵合 029＋ | （ナシ） | （ナシ） | さこそえあらぬ（細字） |
| 絵合 033＋ | （ナシ） | （ナシ） | これは人さまも（細字） |
| 絵合 044＋ | （ナシ） | （ナシ） | ゐを興ある物に（細字） |
| 絵合 046＋ | （ナシ） | （ナシ） | いましめて（細字） |
| 絵合 051 | 女君 | 女君と | 女君と |
| 絵合 054＋ | （ナシ） | （ナシ） | しらて今みん人たに（細字） |
| 絵合 060 | やよひの十日 | やよひの十日の | やよひの十日の |
| 絵合 065＋ | （ナシ） | （ナシ） | 今めかしき（細字） |
| 絵合 065＋ | （ナシ） | （ナシ） | こよなふまされり（細字） |
| 絵合 071 | 竹とりのおきな | 竹とりのおきなに | 竹とりのおきなに |
| 絵合 073＋ | （ナシ） | （ナシ） | めもおよはぬならん |
| 絵合 073＋ | （ナシ） | （ナシ） | もゝしきのかしこき |
| 絵合 073＋ | （ナシ） | （ナシ） | あへのおほしか |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 絵合 073＋ | （ナシ） | （ナシ） | くらもちのみこ |
| 絵合 076 | としかけ | としかけは | としかけは |
| 絵合 076＋ | （ナシ） | （ナシ） | ならひなしといふ（細字） |
| 絵合 078 | （ナシ） | みちかせ | （ナシ） |
| 絵合 081 | 正三位 | 正三位を | 正三位を |
| 絵合 093 | いまあらためかゝむ事 | いまあらためかゝむ事は | 今あらためかゝん事は |
| 絵合 095＋ | （ナシ） | （ナシ） | 年の内の節会（細字） |
| 絵合 099 | えんにそきたる | えんにすきたるちんのはこ | えんにすきたるちんの箱 |
| 絵合 100 | （ナシ） | 心は | 心は |
| 絵合 102 | さこんの中将 | 左こんの中将を | さこんの中将を |
| 絵合 103 | かう〳〵しきに | かう〳〵しきに | かう〳〵しきは（「は」―高本「に」） |
| 絵合 107 | おとゝをもつらしと | おとゝをもつらしと | おとゝをもつらし |
| 絵合 107＋ | （ナシ） | （ナシ） | すきにし方の（細字） |
| 絵合 113 | こうらう殿 | こうらう殿の | こうらう殿の |
| 絵合 114 | （ナシ） | をの〳〵心よせつゝ | （ナシ） |
| 絵合 118＋ | （ナシ） | （ナシ） | わらはあを色に柳のかさみ |
| 絵合 118＋ | （ナシ） | そちの宮も | 山吹かさね |
| 絵合 120 | そちの宮 | ふかうしろしめしたらんと思に | そちの宮も |
| 絵合 125 | （ナシ） | おとゝもいといふにおもほされて | （ナシ） |
| 絵合 126 | （ナシ） | 所〳〵のはんとも | （ナシ） |
| 絵合 127 | （ナシ） | あらまほし | （ナシ） |
| 絵合 128 | （ナシ） | （ナシ） | 左なを（細字） |
| 絵合 129＋ | 院の | 院のゝたまはせし | 院のの給せ |
| 絵合 132 | をのつからうつさんも | をのつからうつさんに | をのつからうつさんに |
| 絵合 138 | （ナシ） | （ナシ） | 文才（細字） |
| 絵合 143＋ | まさなきまて | まさなきまて | またなきまて |
| 絵合 145 | 廿日あまり | 廿日あまりの | 廿日あまりの |
| 絵合 146 | （ナシ） | （ナシ） | 権中納言（細字） |
| 絵合 148＋ | うへ人の中に | うへ人の中に | うへの中に |
| 絵合 150 | | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 絵合 151＋ | （ナシ） | （ナシ） | 又かさねて（高本ナシ） |
| 絵合 152 | うら〳〵のまきは | うら〳〵のまきは中宮に | うら〳〵のまきは中宮に |
| 絵合 153 | またのこりて | またのこりの | またのこりの |
| 絵合 155＋ | （ナシ） | （ナシ） | うへの御心はもとより（細字） |
| 絵合 158 | （ナシ） | むかしのためしをみきくに | （ナシ） |
| 絵合 161 | するゑの君たに | するゑの君たち | するゑの君たち |

この〔表〕から分かることは、次のような点である。

①『細流抄』にある項目はすべて本書にも『明星抄』にもある。

②『細流抄』にはなく、本書と『明星抄』に共通する項目がある（関屋 013・037、絵合 026・100）。また、三書ともにある項目でも、本書と『明星抄』が共通して『細流抄』とは微妙に表現が異なる例もある（関屋 006・010・011・014・022、絵合 028・051・060・071・076・081・093・099・102・113・120・138・146・153・161）。

③『細流抄』や本書にはなく、『明星抄』のみに見える項目もある（表中、通し番号に「＋」が付してあるものすべて）。しかもその多くは高松宮家本では細字で書き入れられている項目である。また、三書ともにある項目でも、『細流抄』と本書が共通して『明星抄』とは微妙に表現が異なる例もある（絵合 006・010・019・107・145・150・152）[14]。

こうした現象から判断すれば、おおよそ『細流抄』→本書→『明星抄』という継承過程が浮かび上がってくる。『明星抄』が『細流抄』を包含しつつさらに成長した注釈書であることが明らかであろう。そうした中で、特に②は本書と『明星抄』との近さを証明するもので、本書を歴史的に位置づける上で興味深い。

しかし、さらに重要なのは、

④『細流抄』にも『明星抄』にもなく、本書にしか見えない項目がある（絵合 078・114・125・126・127・128・158）。

という事実である。しかも、そのいずれもが明らかに細字で余白や行間に補入されたものなのである。これは、『明星抄』成立後も本書の注記が増殖し、『明星抄』とも異なる注釈書としての価値を持つものになっていた可能性を示唆するのではないか。伊井は、そうした増補された本書を

もとに『明星抄』とは別の新たな注釈書として、『岷江入楚』中に引かれる「秘抄」が誕生し、[15]さらに「公条の『聞書』（本書のこと：安藤注）は増補をくり返しながら、それを源泉としていく種かの注釈書が派生していった」[16]と述べている。公条の講釈を聴聞した人々によって作られた他の聞書・注釈書などに、『明星抄』とも異なる本書独自の影響を個別に探ることによって、そうした本書の意義は明確になってくるであろう。

ただし、今回取り上げた「関屋」「絵合」両巻の範囲について言えば、本書が増補した独自注記④が他書にそのまま受け継がれている例を今のところ見出しえない。例えば、絵合158「むかしのためしをみきくに」では、本書は『後漢書』と『文選』所収「運命論」を引いて注記している。一方、九条植通が公条の講釈を聴講した際の聞書を資料にしてまとめられた『孟津抄』にも、「むかしのためしを見きくにもよはひたらてつかさくらゐたかくのほり世にぬけぬる人のなかくたもたぬわさなりけり」という項目があり、本書同様に『後漢書』と『文選』を引用している（他にも『金光明経』や『史記』なども載せる）のだが、そこは「河」と略記があり、つまり『河海抄』からの引用なのである。[17]実際、既に『河海抄』に同じ注記が存在しており、[18]本書に基づいて『孟津抄』が注記したものとは判断できない。その点、中院通勝（実枝の甥）の『岷江入楚』[19]も同様である。

そうした中で、絵合125・127は、注記内容は必ずしも一致しないものの項目自体は『孟津抄』に受け継がれており、特に126「おとゝもいといふにおもほされて」の注記「読キルヘシ」と、『孟津抄』の「ふかうしろしめしたらんとおもふに」の項目（125に該当）に「切ておとゝもとよむへし」とが対応していることは注目に値しよう。また、絵合078「みちかせ」に書かれた小野道風の二つの系図のうち、（『河海抄』にもない）書家の系譜を表す前者と、『孟津抄』「ゑはつねのり手はみちかせ」の項目に、

王義之―道風―魚養―弘法大師

手跡師伝次第如此右四人之事道風を出したるによりて載之也

とあることとは関連するのではないか。全体からすればささやかな例ではあるが、本書と『孟津抄』との何らかの関係を暗示するものと考える。

いずれにせよ、本書の特徴を『源氏物語』注釈史あるいは三条西家源氏学の歴史の中に正しく定位するためには、個々の注釈内容や表現を比較検討すること、引用されている『源氏物語』本文の性格を測定することなどの他に、まずもって本書の全体像を具体的に提示する必要がある。本稿では、二つの巻の見出し項目のみを対象としたごく限定的な考察を加えただけであり、あくまでも中間報告を出ない。今後の課題としたい。

（安藤　徹）

**註**

（1）『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八四年）の「細流抄」の項（伊井春樹）。ただし、岩坪健「『細流抄』の享受―堂上派と地下派―」（『源氏物語古注釈の研究』和泉書院、一九九九年）によれば、『細流抄』は「室町時代においては『萬水一露』が引用しただけの秘伝書であった」という。

（2）宮川葉子『三条西実隆と古典学〔改訂新版〕』（風間書房、一九九九年）「序説」

（3）以下、本書の成立に関しては、伊井春樹『源氏物語注釈史の研究　室町前期』（桜楓社、一九八〇年）や同編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）を参照しつつまとめた。

（4）註（2）宮川前掲書第二部「三条西実隆の古典学」第一章「源氏物語の注釈活動とその周辺」第八節「第一次「弄花抄」から「細流抄」への道筋」では、文明一八年（一四八六）ごろに出来上がっていた可能性を指摘する。

（5）註（2）宮川前掲書第二部「三条西実隆の古典学」第一章「源氏物語の注釈活動とその周辺」第十節「能登畠山義総への「源氏物語」・「桐壺巻聞書」・「桐壺愚抄」送付」は、義総がもともと所望したのは公条の聞書ではなかったかとする。

（6）『源氏物語註』（逍遙院実隆（講）、請求番号11421-1）一冊。「柏木」巻から「竹河」巻まで。狩野文庫のマイクロ資料（丸善）にも収められている。また、註（3）伊井編前掲書によれば、東海大学桃園文庫蔵『源氏物語聞書』（新写本）も一連の資料であるらしいが、その原本の所在については不明という。

（7）「古簡雑纂」所収の義総書状（一二月五日）。天文三年と考えられる。引用は、米原正義『戦国武士と文芸の研究』（おうふう、一九七六年）による。

（8）註（3）伊井前掲書。

（9）龍谷大学大宮図書館編『龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録（総記・言語・文学之部）』（龍谷大学、一九九九年）

（10）なお、龍谷大学大宮図書館の写字台文庫には本書の転写本（請求番号913.36-14-16）があるが、そちらについて目録は『源氏物語聞書』と仮題する。こちらの方が穏当であろう。

（11）ツレである東北大学本も同様である。

（12）龍谷大学善本叢書の一冊として、本書の影印と翻刻を二〇〇四年度中に公刊する予定である。

（13）以下、『細流抄』は伊井春樹編『源氏物語古注集成　第7巻　内閣文庫本細流抄』（おうふう、一九八〇年）に、『明星抄』は中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊　第四巻　明星抄　種玉編次抄　雨夜談抄』（武蔵野書院、一九八〇年）にそれぞれよる。

（14）そのうちのいくつかは、『明星抄』の翻刻の誤りではないかと思われるものもあるが、調査には至っていない。

（15）註（3）伊井前掲書参照。

（16）註（3）伊井編前掲書の「明星抄」の項。

（17）『孟津抄』は、野村精一編『源氏物語古注集成　第4巻　孟津抄　上巻』（おうふう、一九八〇年）による。

（18）『河海抄』は、玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年）による。

（19）『岷江入楚』は、中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊　第七巻　岷江入楚自十二須磨至廿常夏』（武蔵野書院、一九八六年）による。なお、実枝の注釈書『山下水』（現存本）には当該巻部分はない。榎本正純編『源氏物語山下水の研究』（和泉書院、一九九六年）参照。

**付記**　本稿第二節は、石黒による調査と翻字データに基づき安藤が若干補訂した（したがって、二は主に石黒の研究成果である）。また、岩田行展氏の協力を得た。記して感謝する。